

西田哲学学会会報

第二十一号

題字 上田閑照

発行・西田哲学学会

〒九二九-1126

石川県かほく市内日角井一番地

石川県西田幾多郎記念哲学館内

電話(〇七六)二八三六六〇〇

西田哲学学会第二十一回年次大会報告

Felipe Ferrari Gonçalves

西田幾多郎哲学会第二十一大会は、西田幾多郎が教授として勤めていた京都大学文学部に於て、令和五年七月二十二日(土)二十三日(日)に開催された。新型コロナウイルスパンデミックの四年目であるこの二〇二三年も、昨年と同様に対面とオンライン併用の、いわゆるハイブリッド形式で行われた。両日は真夏のように蒸し暑かったが、日本はコロナ禍以降三年ぶりにようやく世界との自由な往来が再開できるようになり、京都は外国人観光客で混雑していた。同様に、本学会は徐々に国際化されてきており、今年度の大会には日本のみでなく、北米、南米、欧州、そして東南アジアの研究者も京都学派の聖地である

京都に集い、『善の研究』購読、研究発表、講演会、シンポジウム、さらに四年ぶりに行われた懇親会にも参加し、有意義なディスカッションを行った。

研究発表

一日目午前には、地下大会議室にて対面形式で名和達宣氏(真宗大谷派教学研究)と石井砂母亜氏(跡見学園中学校高等学校)による『善の研究』第4編第4章「神と世界」の購読が行われた。また第二講義室にて、研究発表Iが外国語セッション(英語)として行われた。一人目は Steve Lofts 氏 (King's University College at Western) による「Nishida's Auseinandersetzung with

Hegel's *Philosophy of Right*: Infinity, Bottomless Time, the Historical World, and Ethical Life (西田によるヘーゲルの『法哲学』との対決——無限・無底の時間・歴史的世界・人倫性——)であった。発表者は西田における「歴史的世界に於ける古物の立場」と「絶対矛盾的自己同一」にあるヘーゲルの哲学の影響を明らかにし、ヘーゲルとの対決 (*Auseinandersetzung*) が戦時中の西田の政治的立場を明確にすると論じた。二人目は、Sova P. K. Cerdas 氏 (京都大学) による「Religion and Philosophy: Contextualizing Nishida's Critique of Nishida」であった。Cerdas 氏は、西田幾多郎と西谷啓治における「宗教」

と「哲学」の概念を説明しながら、二人の関係をプラトンとアリストテレスの師弟関係と比較した。講演会の後、一日目の午後には、「不可逆と逆対応」——西田幾多郎と滝沢克己の哲学的交流を巡って——というパネル発表が行われた。一人目の発表は喜多源典氏(関西大学)による「西田哲学における不可逆と逆対応——『無の自覚的限定』から『場所的論理と宗教的世界観』まで——」であった。氏は西田の思考には「絶対者」と人間との関係に「不可逆」性を有した構造が見られると論じた。二人目の発表は前田保氏(滝沢克己協会)による「拙著『西田幾多郎と瀧沢克己』について」であった。氏は瀧沢克己と西田の間の思想的角逐を明らかにした。前田氏によると、西田における「逆対応」は絶対矛盾的自己同一の逆対応であるが、滝沢克己の場合不可分・不可同・不可逆の不

可逆であり、滝沢が西田哲学に「不可逆」が十分でない」と批判した。両発表の後、「逆対応」と「不可逆」という概念についてのディスカッションが行われた。二日目午前は地下大会議室と第二講義室の二会場に分かれ、六つの研究発表が行われた。地下大会議室での一人目の発表は、落合開智氏(立正大学)による「中期西田哲学の広義に於ける行為的一般者と否定性」であった。氏は、「叡知的世界」および「總説」を分析し、「一般者」西田における「絶対無の場所の自己限定」を明らかにした。二人目の発表は、森レイ氏(京都大学)による「なぜ個人的自己は歴史的主体ではないのか——後期西田における「主体」の概念——」であった。発表者は西田における「主体」と「環境」という概念を説明し、西田における「自己」は単に「主体」ではなく、「歴史的主体」に媒介されるものであると論じた。三人目の発表は岩井洋子氏(東京女子大学)による「西田幾多郎の天皇論」における象徴天皇制の萌芽についてであった。発表者は西田の政治哲学における「天皇論」およびその重要性和、田辺

元における戦後の天皇の役割を説明し、両者の天皇論の相違について論じた。

第二講義室での一人目の発表は、太田隆氏による「日本国憲法前文は西田幾多郎の思想」であった。発表者によると日本国憲法は『善の研究』から強い影響を受けたので、トーマス・ジェファソンは米国立宣言やジャン・ジャック・ルソーのフランス人権宣言と同様に、西田の思想は日本国憲法に強い影響を与えたという。二人目の発表は、松木貴弥氏（大阪大学）による「弁証法的物質的な身体——『無の自覚的限定』における個物と身体——」であった。

講演会報告

「『もの』と言語行為

大会第一日目の午後には嘉指信雄氏による講演会が行われた。講演タイトルは、「『もの』と言語行為 戦争の時代に問い直す——鶴見俊輔と森瀧市郎を補助線として——」。多くの議論や論点を含んだ内容であったが、講演時間の関係から嘉指氏

発表で、「無の自覚的限定」における「個物」は弁証法的物質的な身体を持ち、「個物」の独立性は個物の身体によって担保されると説明された。三人目の発表は、Agnieszka Kozyra氏（University of Warsaw）による「西田幾多郎の絶対矛盾的自己」同一の論理とパーシー・W・ブリッジマンの操作主義の理論」であった。発表者によると、西田は現代物理学（特にアインシュタインの相対性理論）に深い関心を持ち、特にブリッジマンにおける操作主義の倫理は「絶対無」という概念に強い影響を与えたということである。

戦争の時代に問い直す」

竹花 洋佑

は鶴見俊輔を中心に話されたので、この報告もそれにならうことにする。

鶴見俊輔といえば、丸山真男と並ぶ代表的な戦後知識人であるが、本講演で論じられたのはプラグマティストとしての鶴見であった。そうした観点を選ば



れたのは、今大会の全体テーマである西田哲学とプラグマティズムに連動してのことである。嘉指氏は鶴見とプラグマティズムの関係を考察することは、西田あるいは三木とプラグマティズムとの関係を考えるに際して間接的に重要な視点になりうる

と強調する。鶴見の思想形成を丹念に辿っていった嘉指氏の講演には大きく言って二つの強調点があったように思われる。一つは、鶴見のプラグマティズム受容と悪の問題であり、もう一つは戦後のデューイ再評価と「ネガティブ・ケイパビリティ」と関係がある。

ハーバード大学でジェイムズ

嘉指信雄 (広島市立大学)

について卒論を書いた早熟の鶴見は、分析哲学の記号論の文獻に親しみつつも、柳宗悦からの影響の下に神秘主義あるいは実存主義的な傾向を多分に有していた。そうした志向はインドネシアでの軍務経験によって悪の問題への自覚へと深められることになる。戦後、鶴見が「言葉のお守りの使用」——「国体」「皇道」あるいは「民主主義」などの言葉の「ニセ主張的使用」のこと——を論ずる際には、論理実証主義のような精緻な論理構造を積み上げる人間像をモデルとするものとは別の現実理解がある。それはむしろ不完全で誤った言語使用によって構成される現実である。そのような意

味で、鶴見の「言葉のお守りの使用法」論は、プラグマティズムの可謬主義を含む言語行為論であり、同時に「言語使用のダークサイド」に注目する今日の議論を先取りしていると嘉指氏は強調する。

当初鶴見はデューイの思想をそれほど評価していなかった。嘉指氏によれば、人間あるいは社会の暗黒面に眼差しを向ける鶴見には、デューイの社会改良主義はあまりにも楽天主義的に映ったのである。ところが、後に鶴見は『経験としての芸術』のデューイを高く評価する。その中の「ネガティブ・ケイパビリティ」という思想に注目したからである。積極的に何かを成すわけではないが現実を受容する能力を意味し、そうであるがゆえに困難にあつて持ち堪えることを可能にする「ネガティブ・ケイパビリティ」に、嘉指氏は、他者を受け入れ自己を批判的に見直すことを思想的な拠点とする鶴見のあり方を見ようとする。

シンポジウム報告

「西田幾多郎とプラグマティズム」

中嶋 優太

例年同様、今大会でも二日目の午後にシンポジウムが開催された。「西田幾多郎とプラグマティズム」というテーマは、今後数年をかけて西田哲学の形成とそれに影響を与えた思想家を初期西田哲学から順に追ってみたいという思惑のもと、その第一弾として構想されたものである。来年以降、この長期的な思惑がその通りに行くかどうかは分からないが、とにかく、初期

西田哲学への影響ということも考えた場合、W・ジェイムズの名が上がることは誰もが納得するところだろう。今回は、そこにC・S・パースを加え、西田、ジェイムズ、パースの三者関係のなかでシンポジウムが企画された。

西田哲学への影響ということも考えた場合、W・ジェイムズの名が上がることは誰もが納得するところだろう。今回は、そこにC・S・パースを加え、西田、ジェイムズを中心に研究されている。ジェイムズ哲学を論じた『心の形而上学—ジェイムズ哲学とその可能性—』のほか、近著『始原と根拠の形而上学』では西田哲学についてもいくつかの角度から論じられている。まず、それぞれの提題を振り返りたい。

石田氏の提題は「パースの時代・西田の場所 —連続と断絶のはざまから—」と題し、パースと西田の近さを、特にカント哲学や数学との関係に注目して論じられた。まずパースの「プラグマティズムの格率」に目を向け、その背景に物質を力、さらには「作用」や「効果」として捉えるパースの考察があったこと、また、それがカントの「現象的實在」の発想と近いことが確認される。このようにパースはカントから大きな影響を受けているが、他方でカントとの相違もあり、それが西田とパースの第一の共通点になる。パースはカントの「経験的なカテゴリー」と「純粹悟性的カテゴリー」との区別を採用せず、また、純粹な悟性や理性といった「超越論的」な諸力も必要としない。西田もまたカントの統覚を純粹経験の統一の一種として捉えるのであり、アプリアオリは経験のただ中にある、とする、経験内部への揺るぎないコミットメントが、パースと西田をつなぐのだという。また、パースの記号論的世界像に関して、それがカントに残っていた物理主義・物質主義的側面からの解放を意味するものだと捉え、その点でも西田と共通するという。

西田とパースの第二の共通点としては数学への関心が挙げられる。氏は、西田が論文「経験内容の種々なる連続」の中でカントールの無限論を参照して展開している議論を引き、「数理」を「論理」へ活かすというアプローチが西田とパースに共通していると指摘する。また「数理は論理の根元」という『自覚に於ける直観と反省』での西田の言葉を引きつつ、西田が論理主義に批判的な立場をとっていたことを示し、その点でも「論理学は、数学によって導かれる」としたパースと共通していることなどが指摘された。最後に、西田とパースが生きた場所と時代の差異に目を向け、両者には哲学上の類似点が多いけれども、その具体的な立ち位置には大きな断絶があることも見逃してはならないとして、提題を締めくくられた。



提題者は石田正人氏(ハワイ大学)と沖永宜司氏(帝京大学)、司会は本報告を執筆している中嶋優太(石川県立看護大学)

沖永氏は「ジェイムズ、西田と現代汎心論」と題し、現代汎心論を背景に、ジェイムズ、西田それぞれの汎心論の特徴を浮き彫りにされた。まず、現代の汎心論においては、なぜ物質から意識が生じるのかという「意識のハードプロブレム」から汎心論が帰結する。ここでは汎心論は物理主義、合理主義と対立するのではなく、それらを徹底することから生じるという。沖永氏は心の哲学、論理的中立一元論、二〇世紀プロセス思想、量子論と、現代哲学のなかの様々な汎心論的傾向を整理したうえで、ジェイムズへと目を向け、それを「矛盾的脱合理的汎心論」と特徴づける。同じ経験はある文脈のなかでは主観的意識として、別の文脈では客観的物事として把握される。ジェイムズの純粹経験は文脈以前であ

数学によって導かれる」としたパースと共通していることなどが指摘された。最後に、西田とパースが生きた場所と時代の差異に目を向け、両者には哲学上の類似点が多いけれども、その具体的な立ち位置には大きな断絶があることも見逃してはならないとして、提題を締めくくられた。

パースの時代・西田の場所
——連続と断絶のはざまから——

石田正人(ハワイイホロロ)



沖永宜司(帝京大学)

るから、この主客を同時に含む。氏はこうした『根本的経験論』での議論を単に認識論的中立としてではなく、存在論的に汎心論としてとらえる可能性をD・ランパースの議論などを引きつつ検討した上で、『多元的宇宙』の「真であるためには、事物は何かの点でそれ自身の他者でなくてはならない」という一節に目を向ける。ヘーゲル哲学の批判的受容から得られたこの発想を吟味した上で、矛盾の同時成立のためには、合理性をいったん離れ、合理性を捨てればよい、というのがジェイムズの立場であったとする。氏は、ついで、西田哲学に目を向け、それを「矛盾的自己同一的汎心論」と特

徴づける。ここでも、西田哲学研究の中で、必ずしも十分に追究されてこなかった、西田の純粹経験の存在論的な文脈が注目される。現代汎心論は物理的閉塞という前提に立つのに対し、ジェイムズは(そしておそらくパースも)そうした物理的閉塞自体を、実在から抽象された状態と見なすが西田も同様である。物質と意識との対立を成り立たせる枠組み以前への回帰を、ジェイムズが合理性からの離脱としたのにならして、「自己同一」というある意味合理性の範囲に含めるのが西田の特徴であるとされる。このようにジェイムズ、西田のそれぞれの汎心論の特徴を際立たせたいので、

沖永氏は、論理的要求として求められている現代汎心論にたいして、西田、ジェイムズの汎心論は直接経験の直観が根底になっっていることなどの特徴を挙げ、それをテキスト内部世界の物語にとどめてはいけないうとして、古典的汎心論の理解が現代汎心論に寄与する点を吟味すべき、と提題を閉じられた。こうした二つの提題を受けて、討議では「合理性を捨てる」というジェイムズ⇨沖永の考え

『善の研究』講読会報告

『善の研究』講読会は、第二回大会(二〇〇四年)から続いている西田哲学会の伝統的な講座であり第二十一回大会では七月二十二日(土)の大会初日午前中に実施された。名和達宣氏が立候補して講師となり、名和氏からの指名もあって石井がサブ講師を務めた。二人の関心から第四編「宗教」第四章「神と世界」を講読箇所を選んだが、仏教とキリスト教の立場から西田哲学を場とした宗教間対話を行えないかという話になり、テキストを二人で分担して精読する

方やジェイムズの生理学者・心理学者としての側面と形而上学者としての側面、そこでの身体感覚のとらえ方、あるいはパースにおいて数理が論理に先立つとはどういうことか、など様々な論点について提題者間で意見が交わされた。また、フロアからもジェイムズの存在論的中立の解釈、西田の自己限定、相補性の概念など多数のコメントが寄せられた。

のではなく、座談会形式をとることにした。タクトを振るうのは名和氏である。真宗教学に精通した名和氏の問題関心に沿って、西田の宗教論全体における「自力と他力」、「罪悪」の問題を、『善の研究』をテキストとして二人で考えてみることにした。名和氏が前半に提題し、真宗との関わりから『善の研究』第四編を紐解かれた。名和氏は、後年に至るまで西田が親鸞に共感を示したこと、特に遺稿論文「場所的論理と宗教的世界観」が浄土真宗の世界観を一つ投影し

たものであり、西田の『教行信証』を読むという経験に裏づけられて執筆されたものであることをテキストに依拠しながら説明された。また、講読形式を取らない代わりに『善の研究』第四編第四章の全五段落を丁寧な要約し、その上で名和氏は対話の焦点として「自力と他力」、「罪悪」の問題を掲げられた。名和氏によれば、最晩年の宗教論が他力の立場にあるのに対して『善の研究』は「純粹経験の統一」から論じられており「自力」を強調しているようにも読める。それは真宗の立場からは受け入れがたいところがある。絶対無限なる神と世界の関係を論じるに際しても、矛盾衝突、分裂が指摘されるものの、それは実在発展の必然的過程、あるいは一要件とされている。神と人との合一(統一)を強調する『善の研究』の立場はやはり真宗の立場とは大きく異なり、絶対者と相対者との対立を強調しながら絶対者の自己否定において神と人との関係を論じる最晩年の宗教論とも相違がある。罪悪の問題に同じく同様であり、この転換がいつどのように行われたのか、名和氏は神による創造の問題にも踏み



込みながら、会場に大きな問いを投げかけられた。

第四編第四章をオスカー・ワイルド『獄中記 *De Profundis*』の引用で終える西田から、名和氏の問いに対して応答を試みたのが石井の提題である。『獄中記』は、アルフレッド・ダグラスとの道ならぬ関係が公となり、二年の歳月を獄中で過ごしたワイルドのダグラス宛書簡が元になっている。原題 *De Profundis* はワイルドの死後刊行に際して付けられたタイトルであり、詩篇一三〇篇（絶望に閉ざされた深い淵から神を呼び求める祈り）から取られたものである。 *De Profundis* のテーマは「悲哀 (sorrow)」であり、それは西田が最晩年までモチーフとしたものである。ワイルドは「悲哀」を通して、痛みを抱えた剥き出しの魂と、その魂が神の愛に根を下ろしたものであることを自覚する。放蕩息子（ルカ15:11-32）の譬え話を通して、ワイルドは変えることのできない過去（罪）が神の愛（神の救し）によって刷新されるというモチーフを描いている。

De Profundis の上記の一節を西田が引用したのは、否定的契機（罪悪）を介して实在発展が

可能になるという弁神論的モデルではなく、むしろ神の愛ゆえに放蕩息子が罪を自覚し、罪の救しゆえに罪人が罪人のままに「今、ここ」で新たに創造される「贈与としての救済論／創造論」ゆえたと見るべきである。それゆえ、前期の宗教論においても西田は罪悪の問題に拘泥し、それに身悶えしながら、「哲学の終結と考へている宗教」について自らの考えを展開したと言えよう。しかしながら、当時の西田は「純粹経験を唯一の实在としてすべてを説明して見たい」という体系化への欲求から、罪悪の問題をその生々しい具体相において論じることができなかった。名和氏が指摘するように、神の現前（永遠の今）における過去の刷新、自己の自覚、創造というモチーフは、残念ながら

『善の研究』において明示的には展開されていない。西田がこうした問題に一步踏み込むのは『自覚に於る直観と反省』（一九一七）においてであり、さらに迷い躓く自己、罪の救済と創造の問題に関しては『無の自覚的限定』（一九三三）を待たねばならない。

昨年度に比して参加者に恵まれ、フロアーには十名程度の方が集い、活発な質疑応答がなされた。終了後も担当者に直接質問する様子が見られた。入門講座とは必ずしも言えない座談会になったが、参加して良かったという感想もいただき、冒険に満ちた第二十一回大会の『善の研究』講読会を終えることができた。

（石井砂母重）

パネル発表報告

「不可逆と逆対応——西田幾多郎と滝沢克己の哲学的交流を巡って——」

白井 雅人

第二十一回年次大会開催に際して、西田哲学会は同一テーマを複数人で討議するパネル発表

の公募を開始した。白井がパネル発表を企画し応募したところ、企画が採用され、大会初日

の講演会の後にパネル発表が行われる運びとなった。

「不可逆と逆対応」——西田幾多郎と滝沢克己の哲学的交流を巡って——というタイトルでパネル発表を企画したのは、滝沢克己という存在が「日本哲学史」の中で盲点になりがちであり、西田幾多郎と滝沢克己の関係を西田哲学会という場で改めて問うことに意味があるではないかという問題意識があつてのことである。学生としても教員としても京都大学に在籍経験のない滝沢克己は、「京都学派」という枠組みの中で日本哲学史を考えると、見落とされてしまう存在である。しかし、西田哲学との対話を通じて構築された滝沢克己の哲学を考えることは、西田哲学の継承発展を考える際に、重要な示唆を与えるものだと考えることもできるのである。

本パネルは、企画者の白井による簡単な趣旨説明の後、パネリストの前田保氏と喜多源典氏が報告を行った。

前田氏の発表は、氏が公刊した『西田幾多郎と滝沢克己』に基づくものであった。前田氏によると、西田幾多郎から滝沢克己に宛てた書簡は、学問的師弟関係を裏付けるものであると共

に、研究者同士の共感があつたことも読み取れるものである。しかし一九三六年の滝沢宛の西田の書簡には、滝沢に対して自らの「不徹底」を認めるものがある。この書簡をどのように考えるべきかという問題について

前田氏は、秋月龍珉の「西田幾多郎の逆対応」という概念は、滝沢の批判に答えるものであつた」という記述を手がかりにして、西田の論文「場所的論理と宗教的世界観」を検討する。しかし前田氏の分析によれば、西田の宗教論は、秋月の言うように「逆対応」の概念が滝沢への回答であると単純に読み取れるものではなかった。西田の宗教論には西田自身の課題意識、田辺元への反論、仏教の論理の哲学的構築、仏教における悪の問題という四つの要素が含まれるという小坂国継の分析をもとに、前田氏は「西田自身の課題意識」の中に滝沢への応答があつたと主張する。西田は滝沢の批判に対して「不徹底」を認めたものの、その問題点を克服する論理を構築することはなかなかできなかった。晩年に鈴木大拙の「即非の論理」や務台理作の「場所的論理学」と出会うことによって、ついに滝沢に応

答するきっかけを得たのだと、前田氏は結論付けた。

その上で、前田氏は西田と滝沢の交流の真実を、三点にまとめる。第一は、悪魔的世界と絶対者の関係における対立。第二に、滝沢やカール・バルトのキリスト教的な立場を、西田が仏教の論理で乗り越えようとしたという点。第三は、哲学的な概念で実在を捉えることができる

と考える西田と、それを形而上学とみなす滝沢の対立である。ただし、滝沢の「批判」は、あくまで西田哲学の内部で、西田哲学の徹底を求めるものであつた。二人は実在の共同探究者であり、それ故滝沢は晩年には「逆対応・逆限定」という西田的な用語を採用したりするといふのである。そのため前田氏は、「滝沢の西田批判」という批判的文脈が独り歩きすることの危険性を指摘した。

一方、喜多氏の発表は前田氏とは逆に、西田幾多郎の『無の自覚的限定』以後の思索の中に既に「不可逆」の要素が含まれており、それは最晩年の論文「場所的論理と宗教的世界観」に至るまで一貫していたと主張するものであつた。この場合の不可逆は「絶対者の先行性」とい



う形で定式化できる。絶対者が先行しており、その順序は逆転不可能なものであるというのである。

まず喜多氏は『無の自覚的限定』の「私と汝」を手がかりに、私は汝の呼びかけによって自己自身に死に、同時に汝も私の呼びかけによって汝自身に死するという契機があることを明らかにする。そして、そのような応答関係が可能になるのは、私の底に汝の底に「絶対の他」としての「アガベ」があるからだとする。このアガベとしての神の絶対否定の愛は、「私と汝」の関係を成立させるものであり、我々人間に先立って働く先行性をもつのである。このように『無の自覚的限定』の段階で、逆転できない不可逆的な順序を西田が把握していたと喜多氏は指摘する。

そして、『弁証法的「一般者」や『人間の存在』についても同様のモチーフがあることが駆け足で確認された後、「場所的論理と宗教的世界観」における逆対応についての検討がなされた。「絶対者の側」からみられた逆対応は、絶対者の自己否定があつてこそ個物的多なる我々の自己存在が成立しているという順序があ

り、絶対者が個物的多に対して先行する不可逆性があるとされる。「人間の側」から見た逆対応も、「神または仏の働き」から宗教心が起こってくるものとされ、絶対者の働きの先行性があるとされる。喜多氏によれば、西田の思索は一貫して絶対者の先行性を認める、不可逆的な構造をもつものである。

発表の後には、パネリスト同士の討議、フロアとの討議が行われ、様々な論点について議論を交わした。特に大きな相違点として浮かび上がったのは、「悪魔的なもの」の位置付けであった。前田氏によれば滝沢にとつて神は悪魔的なものには左右されない絶対的存在であるのに対して、喜多氏によれば西田にとつて神は「悪魔的なもの」にまで自己自身を否定して救

う存在である。滝沢の立場から言えば、悪魔は神の対概念ではあり得ないし、神が神であるためには悪魔の存在はまったく不要である。一方、西田の立場から言えば、絶対者の徹底的な自己否定のあり方として、悪魔的なものにもまで自己否定するものでなければならぬ。この問題は一見大きな相違点に見えるが、両者の対立は本当に解消不可能なものなのかどうか。西田哲学における「罪」や「悪魔的なもの」の意味を慎重に考察することは、今後の課題になるであろう。意欲的な発表と、フロアからの積極的な質疑参加によって、初めてのパネル発表は成功裡に終わったと言えよう。

企画者として、発表者や西田哲学学会会員の皆さまに感謝申し上げます。

エッセイ

教育学の中の哲学、哲学の中の教育学

高谷 掌 子

令和五年四月より、石川県西田幾多郎記念哲学館に研究員として着任した。それまでは「教育学」の中に西田哲学の研究をし

ている」と言われていたのが、「哲学館の人なのに教育学もやっている」と言われる立場になった。

京都大学大学院教育学研究科で西田哲学の研究をすることは、それほど奇異なことではない。教育学研究科・学部は、戦後の教育改革によって文学研究科・学部から独立する形で成立した。その意味では、哲学の京都学派の末裔の一つとも言える。初期の教育学研究科・学部の人選に大きな影響力を持ったという下程勇吉は、西田が退職する一年前に文学部に入学していた。下程は哲学的な教育人間学を専門とし、ドイツの教育学者・ボルノウと交流があった。

それで、上田閑照が教育学研究科に助手として着任したとき、最初の仕事はボルノウの講演の通訳をすることだったという（『上田閑照集 第十一巻』後記 宗教へ）。

また、西田の直弟子である教育学者・木村素衛からの系譜もある。木村自身は教育学研究科・学部ができる前に急逝したが、その弟子の蜂谷慶が教授となつている。木村の友人であり隣人でもあった高坂正顕は、戦後の一時期、教育学研究科長を務めたことがある。その高坂の著書を読んで、和田修二は、オランダの教育学者・ランゲフェルトを知り、彼のもとに住み込

み留学をして「子どもの人間学」を構想した。そして、蜂谷と和田の弟子である矢野智司が、近年、以上のような京都学派と教育学の系譜に光を当てている。その成果は『京都学派と自覚の教育学——篠原助市・長田新・木村素衛から戦後教育学まで』（勁草書房、二〇二二年）に詳しい。

矢野の停年退職により、教育学研究科・学部に流れる京都学派からの系譜はいったん途絶えたとはいえ、京都大学で西田哲学の研究をすることには比較的理解が得られやすい。問題は「教育学なのに」の部分である。西田や木村の時代から哲学を学び続けている信濃教育会の先生方ならともかく、たいていの教育（哲学）者の本音は「西田なんて難しくて読めないヨ」であろう（ある懇親会での実話に基づく）。

ならばアレントやレヴィナスやデューイは難しくないのか、という反論は水掛け論に過ぎないが、たしかに改めてなぜ西田なのかと問われると困ってしまう。「京都大学には京都学派からの系譜があるので」、「宗教的なものを言語化しようとしているので」、「海外から注目

されているので:」など、一応の理屈を並べる努力をしてみるのが、残念ながら納得のいく答えができたためしがない。

そういうわけで、西田哲学にしがみつきながら、教育学の中でモゾモゾしていたところへ、西田哲学館での職をいただいた。西田幾多郎の名前を冠する館に着任したからには、なぜ西田なのかという問いはいったん棚上げできる。というよりは、

かほく市で西田という人物に向けられている敬意と期待を知るにつれ、西田を研究しないわけにはいかなくなってきた。哲学館の周囲では、西洋哲学よりも西田哲学、西田哲学よりも西田幾多郎その人の方がよく知られている。その環境で、おそらく

とで。すると今度は、「哲学館の人なの」がうずきだす。哲学館の人なのに、教育学もやっている。たしかに、志望理由書には、教育人間学の立場から哲学館での生涯学習に貢献したいと書いた。けれども、実際に着任してみると、哲学の専門家であるこ

とを期待される場面が多い。立派な大人を相手に、哲学を「教えてあげる」ようなことができているのか？ 学校教育の中で哲学対話が果たす役割とは何か？ そもそも哲学することは、万人に勧められるべき生き方だろうか？ ふとした瞬間に起動される教育学的(?) 思考を保ちつつ、哲学の中での居所を探し続けることだろう。

理事会報告

秋の定例理事会

二〇二二年十月三〇日に、オンラインにて理事会が開催された。

●編集委員会報告

上原委員長から『会報』ならびに『年報』の編集進捗状況が報告された。まず、年報一九号の発行および会報二〇号の校正、配布状況の告知があった。

次に、海外への送付が困難であるため、会報の電子化に関して、今後編集委員会で議論を行っていくことが報告された。

●出版社に関して

諸事情により、これまでの出版社から別の出版社へと依頼先を変更する提案がなされ、承認

された。今後の出版依頼先として、候補がいくつか挙げられ、それを踏まえて編集委員会できらに検討した上で、最終的に理事会のメール審議によって決定することとなった。

●上田閑照基金運営委員会からの報告

二〇二二年十月二十二日〜二十三日に日独文化研究所との共催で実施された国際ワークショップに対して1人あたり十三万円、計四人分の渡航費を助成したことが報告された。なお、この運用は現行の運用方針が決定される前であったため、

現行の運用方針の上限を少し超過している。また、ジャセイント・トランブレイ氏の出版に対する七十八万円の助成の報告があった。

●事務局からの報告

夏の総会で承認された予算案に基づき、例年通りかほく市へ十万円の寄付を行うことが報告された。次に、海外会員のため

のクレジットカード払いに関して、セキュリティ上の問題から一旦停止し、今後の方向について事務局で検討を行っていることが述べられた。そして、幹事のフェリペ・フェハリー氏への学会の英語ホームページおよび

掲示板の管理の委託の検討が行われていることが確認された。

最後に、事務局の体制について、中嶋優太氏の石川県立看護大学への着任を受けて、後任の哲学館専門員が事務局を担当することが報告された。

次に、審議事項として次の議題が挙げられた。

●幹事の退任について

幹事の飯島孝良氏が一身上の都合により幹事の退任を申し出たことを受けて、飯島氏の退任が認められた。

●第二十一回(二〇二三年)年次大会について

来年度の夏の大会を七月二十二日〜二十三日、京都大学においてハイブリッド方式で開催することが提案され、承認された。

プログラム案として講演とシンポジウムに統一性をもたせ、単年だけでなく、複数年を視野に入れ、内容を決定するという方針が美濃部会長と幹事会から提案され、承認された。また、それぞれの年度ごとに次の年度を検討する運びとなった。

新たに、パネル発表として、会員が自主的にグループを作って発表を行う形式を年次大会に設けることが提案され、承認された。併せて、パネル発表のプ

ログラム上の場所や応募締め切り、募集の文言は他学会等を参考に作成次第、理事会のメール審議で検討することとなった。また、パネル発表に基づく論文を年報に投稿する場合の扱いについて、編集委員会で検討することになった。

講演とシンポジウムに関して、石井理事より会長と幹事会で協議されたプログラム案が複数提示された。議論の結果、「西田幾多郎とプラグマティズム」が選ばれた。

講演者、シンポジウム提題者の候補についても協議が行われた。

最後に、林理事からTetsugaku Companion to Nishida Kitaroの出版が報告され、機会があれば書評を書いてほしいという依頼があった。

(森野雄介)

夏の定例理事会

七月十五日(土)に、オンライン会議システムZoomにて、令和五年度第一回理事会が開催された。出席理事は二二名(委任状出席五名を含む)、理事以外に幹事三名が出席した。

●第二十二回年次大会について
令和六年七月二十七日(土)

(二十八日(日))に開催される
ことが決定された。開催校に關
しては継続審議となった。

●編集委員会報告

(一) 上原編集委員長より年報第
二十号が刊行されたことが
報告された。

●事務局報告

(一) 令和四年度会計報告、令和
五年度予算案が提示され、
承認された。

(二) 退会

退会希望者一三名の退会、
除籍候補者六名の除籍が承
認された。

入会について、十一名の希
望が報告されたが、審議の
ための書類が揃わないこと
から、後日メールにて審議
することとなった。

●上田閑照基金の運用について

基金運営委員会の美濃部委員
長より、出版助成申請が一件
あったことが報告された。また、
同じ研究者から出版助成の申請
が続けて出されたことを受け、
上田基金運営委員会で審議し、
一人あたりの助成上限額を計二
百万円としたことが報告された。
●賛助会員の規程作成

秋富理事より、本会規約に
「賛助会員」という名称があるに
も関わらず、具体的な規定がな

いたため、賛助会員の規定を新た
に定めることが提案された。審
議が行われた結果、具体的な規
定を設ける上で検討すべき事項
が多いことから継続審議となっ
た。

●学会ウェブサイト英語版

フェハリー幹事より、学会
ウェブサイトの「英語版」「お知
らせ」の活性化を進めている現
状が報告された。

(中嶋優太)

上田閑照基金について

西田哲学会では、故上田閑照
先生がご遺贈くださったお金を
原資に、「西田哲学研究および広
く日本哲学研究の推進と発展の
ため」に、「西田哲学会上田閑照
基金」を設け、種々の研究助成
をおこなっています。HPに規
約と運用方針、各種申請書式が
掲載されていますので、奮って
ご活用ください。昨年度は、出
版助成一件が採択されました。
出版助成のほか、研究旅費にも
お使いいただけます。ご申請を
お待ちしております。

(美濃部仁)

西田哲学研究会のご案内

・西田哲学研究会「於京都」
京都の西田哲学研究会は、
三ヶ月に一度のペースで開催、
現在は「一般者の自覚的体系」
の諸論考に取り組んでいます。
コロナ禍での再開以来久しくオ
ンライン主体で実施してまいり
ましたが、去る十月一日の会合
より、対面式との併用(ハイブ
リッド形式)に踏み切り、「一般
者の自己限定」の後半を扱いま
した。対面式の会場は京都工芸
繊維大学です。今後も、ハイブ
リッド形式で実施していく予定
です。本件についてのお問い合
わせは、秋富(aktomi@kit.ac.jp)
までお寄せ下さい。

(秋富克哉)

「寸心荘読書会」「於鎌倉」

寸心荘読書会では、鎌倉市稲
村ヶ崎にある西田幾多郎遺邸
(学習院西田幾多郎博士記念館
(寸心荘))にて、市民の方々と
共に西田幾多郎の著作を講読し
ております。参加者(毎回15
~20名程)には高齢の方も多いた
め、コロナ禍の約三年間休会し
ておりましたが、今年の5月に
再開致しました。再開にあたっ

て新たな参加者もあり、五、七
月にわたって三回ほど、西田哲
学についての簡単な講座を行
いました。次回以降「善の研究」
の講読に戻り、従来どおりの年
四、五回のペースの開催とする
予定です。開催日時や講読箇所
につきましては「寸心荘読書会
HP」にてお知らせしております。

(岡野浩・岡野利津子)



石川県西田幾多郎記念
哲学館だより

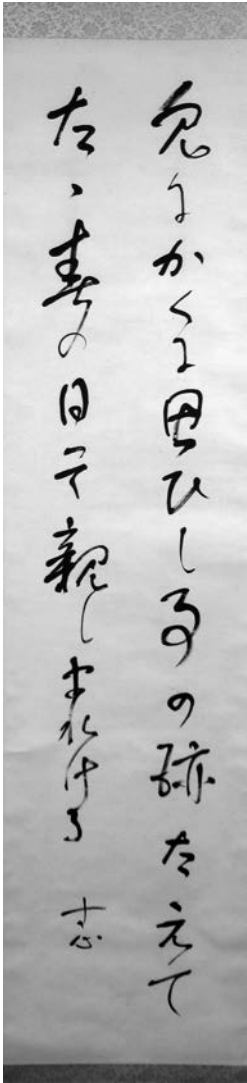
新型コロナウイルスの五類移
行に伴い、平常に近い形で講
座・講演会を実施しています。
ドイツのメスキルヒ青少年訪問
団をはじめ、海外からの来館も
再開されています。

【新展示 西田幾多郎旧宅(京
都・田中上柳町の借家)書齋床
の間】

西田幾多郎が京都大学時代に住んだ借家の一つの床の間部分が、元の部材を用いて哲学館展示室内に復元されました。当時の西田は、『自覚に於ける直観と反省』の執筆に「悪戦苦闘」する一方、妻・寿美が倒れて寝たきりとなり、長男・謙が病気で急逝するなど、家庭的な不幸に相次いで見舞われました。西田の人生で最も苦しかったであろう時期の思索と暮らしを支えた住まいをご覧ください。

【いしかわ百万石文化祭 二〇二三】
第三十八回国民文化祭／第二十三回全国障害者芸術・文化祭が石川県で開催されています。哲学館では、十月二十九日に「哲学シンポジウム スポーツを

企画展「西田幾多郎と短歌」開催中



大正十二年三月三日
兔(と)にかくに思ひし事の跡たえてた、春の日ぞ親しまれける

(西田幾多郎直筆の掛軸、高坂正顕旧蔵)

哲学する」が行われました。また、十一月十九日に「短歌大会」ようこそ、かほくの哲学の道へ」を予定しています。併せて、企画展「西田幾多郎と短歌」(会期：十月三日～二〇二四年三月二四日)を開催中です。ぜひご来館ください。

(高谷掌子)

「年次大会」における
パネル発表・口頭発表
の応募について

第二十二回年次大会(二〇二四年七月二十七日・二十八日、会場 東京方面)でのパネル発表と口頭発表、および『西田哲学学会年報』(第二十一号)掲載論文を公募します。

【パネル発表】

一つのテーマについて数人で提題と討論をおこなうパネル発表(日本語あるいは英語)の企画を公募いたします。

①テーマ、②八〇〇字程度の趣旨、③代表者(当会B・C会員)の氏名と住所(文書等の送付先)、④パネル発表参加者氏名一覧を添えて、【二〇二四年一月末日】までに、事務局宛てに郵便と電子メールにてご応募ください。テーマと参加者氏名については英文表記もお知らせください。採用の可否については、締め切り後に審査の上、可及的速やかにご連絡いたします。応募資格：少なくとも代表者は当会B・C会員であること(代表者以外は非会員であってもかまいません)。

発表時間：討論を含めて全体で九十分(予定)。

【口頭発表】

年次大会での口頭発表(日本語あるいは英語)をご希望の方(当会B・C会員)は、①タイトル、②八〇〇字程度の発表内容概要、③簡単な略歴、④もし研究業績等がありであれば業績書を添えて、【二〇二四年三月末日】までに、事務局宛てに郵便と電子メールにてご応募ください。また、発表タイトルと氏名の英文表記、および、文書等の送付先もお知らせください。審査を経て、発表者が決定されます。

『西田哲学学会年報』掲載
論文の公募について

西田哲学学会年報第二十一号(令和六年七月発行予定)。詳細は下記をご覧ください。『西田哲学学会年報』投稿規定・執筆要項(二〇一九年六月三十日改定)。

第二十一号掲載分に関しましては、締め切りが令和五年十月末となります。ご投稿いただいていた概ね一週間以内に返信いたします。返信がない場合、何らかのトラブルで届いていない可能性がありますので、改めて事務局までお問い合わせください。

編集後記

第二十一回年次大会は、編集委員長の本拠地、京都大学で開催されました。「コロナ対策」による諸制限がなくなり、もとの賑わう学会風景が戻ってきた感があります。この度は、参加者数が増えたということのみならず、新企画の「パネル」が加わり、また様々

な場面で発言する世代がベテランから後輩へ少し移行したなど、確かな変化が見られました。外国の皆様が見事な日本語で発表し質疑に参加され、という様子を目の前にし、西田哲学が既にかつかりと世界の哲学になったという実感が湧いてまいりました。何やら誇らしい気分になりました。(編集委員長 上原麻有子)